

# 成果報告書

記入日 2015年 1月 19日

氏名	上田 真啓	渡航先国名	インド共和国	所属機関	Lalbhai Dalpatbhai Institute of Indology
研究テーマ：ジャイナ教哲学文献における聖典解釈法 の 思想史的研究					
研究期間： 12年 11月 ~ 14年 11月					
<b>研究成果（概要）</b> ジャイナ教哲学文献の読解を通じて、「ニクシェーパ」という概念の歴史的な変遷が明らかになった					
<b>研究成果（詳細）</b> 奨学金申請時及び経過報告において、研究計画及び方法を【文献収集および解読研究】と、【現代インド地方言語の習得】の2つに分けて説明した。今回もまた、そのふたつの項目に沿って、今回の研究の成果を報告することとする。 <b>【文献収集および解読研究】について</b> 申請時に研究テーマの概要においても述べたとおり、本研究の目的は、「ニクシェーパ」という、インド思想史のなかでもジャイナ教に特有の概念について、これの歴史的な変遷を明らかにすることであった。そしてそのために、ジャイナ思想史の中でも最も権威的なテキストと目されている『タットヴァ経』およびそれに対する諸註釈文献を中心に、そこから時代的に遡る諸聖典文献と、『タットヴァ経』よりも後の諸哲学文献との原典解読研究を行う、というのが本研究の具体的な方策であった。さらに、経過報告においては、それまでの研究の結果に従って、ジャイナ教思想史に多大な影響を与えたと考えられるジャイナ教哲学者及び哲学文献群を足掛かりに、ジャイナ教の思想史をさらに細かく以下の4つに区分し、それぞれの時代に属するテキストの読解に基づいて、各々の時代のなかでの「ニクシェーパ」という概念の性質を明らかにすることによって、この概念の歴史的な変遷を追うことができると述べた。 1. ジャイナ教聖典（アーガマ）の時代（ジャイナ教哲学の萌芽期） 2. 『タットヴァ経』とその注釈文献群（ジャイナ教哲学の初期） 3. アカランカにおける「ニクシェーパ」（ジャイナ教哲学の中期：円熟期） 4. ヤショーヴィジャヤにおける「ニクシェーパ」（ジャイナ教哲学後期） 留学期間の後半においても、上の各区分ごとに重要と目されたテキストの解読研究を継続し、その結果、この概念の歴史的な変遷が明らかになったことをこの研究の成果として報告したい。					

そのため、当成果報告においても引き続き、上記の4つの区分に従って、それぞれの研究の成果を報告していきたい。

### 《1. ジャイナ教聖典（アーガマ）の時代（ジャイナ教哲学の萌芽期）》

ジャイナ教の聖典は、プラークリット語と言われる一連の古代インドの地方言語のひとつ、半マガダ語によって記述されており、ジャイナ教の聖典、すなわち、プラークリット語テキストの解読研究は今回の研究における大きな課題のひとつであったことは、申請書ならびに経過報告において報告したとおりである。報告者は、グジャラート大学プラークリット語学科の Saloni Joshi 教授の協力の下でプラークリット語テキスト読解の演習に取り組み、個々のテキストの精読を通じて、「ニクシェーパ」という単語が登場する場面を検証し、聖典期における「ニクシェーパ」の性質を明らかにした。

### 《2. 『タットヴァ経』とその注釈文献群（ジャイナ教哲学の初期）》

『タットヴァ経』は、ジャイナ教の思想史のなかでも聖典の時代の後期に位置し、また、体系的な思想が築かれる時代の初期に位置するテキストであり、非常に整った形でジャイナ教の教義が体系的に述べられているという点で、ジャイナ教の2大宗派である空衣派と白衣派の両派によってその権威が認められている。このような『タットヴァ経』のはじめの部分に、「ニクシェーパ」への言及が見られる。『タットヴァ経』自体では、簡潔に「ニクシェーパ」の存在が述べられているにすぎず、報告者は、以下の4つのサンスクリット語注釈文献の解読研究をもとに、『タットヴァ経』における「ニクシェーパ」解釈を明らかにした。

1. シッダセーナ・ガニ（白衣派）による注釈
2. ハリバドラ（白衣派）による注釈
3. プージュヤパーダ（空衣派）による注釈
4. アカランカ（空衣派）による注釈

### 《3. アカランカにおける「ニクシェーパ」（ジャイナ教哲学の中期:円熟期）》

アカランカは、ジャイナ教の思想史の中において最も偉大な論師のひとりに数え上げられており、認識論の体系を完成させたと伝えられている。彼は、先述の『タットヴァ経』の注釈に加えて、

1. 『シッディヴィニシュチャヤ』
2. 『ラギーヤストラヤ』
3. 『プラマーナサングラハ』

の中でニクシェーパに言及している。これらのテキストの中で、アカランカは自らが展開する認識手段の体系と、この「ニクシェーパ」という概念を関連づけようとした。それらの研究の成果として、以下の研究発表をおこなった。

- ・ "Nikshepa in Akalanka's works" (於 ロンドン大学 School of Oriental and African Studies (SOAS), Centre of Jaina Studies, 15th Jaina Studies Workshop)

## 《4. ヤショーヴィジャヤにおける「ニクシェーパ」(ジャイナ教哲学後期)》

アカランカ以降のジャイナ教の学者達は皆、完成された彼の理論をほぼ踏襲するような状況であった。ヤショーヴィジャヤは、ジャイナ教の思想史のなかでも最も後期に位置するとされる学者で、その著書、『ジャイナタルカバーシャー』はアカランカの『ラギーヤストラヤ』の体裁を採用して、「ニクシェーパ」についても特別に章を設けて述べているが、内容的にはアカランカの説に加えて、より古い層のテキストと、それに連なる注釈文献からも多数引用し、折衷するようなかたちで独自の「ニクシェーパ」理解を示している。この研究の成果は、

- ・「ヤショーヴィジャヤのニクシェーパ論」, 『年報』24号, 筑紫女学園大学人間科学研究所として発表した。

以上のようなテキスト横断的な解読研究が可能であったのは、アーメダバードという環境において、日本においては入手するのが困難であるようなテキストにアクセスし易かったからに他ならない。つまり、解読研究を可能たらしめた文献収集という研究活動においてもまた、一定の成果が得られたということである。

また、文献の収集に関連しては、訪れたジャイナ教寺院での体験をもとに、巡礼地としての意義とは別に、文献の保存と伝承のための施設としてのジャイナ教寺院の意義について以下の発表を行った。

"The significance of Jain tirtha", International Seminar on Sacred Places: Cosmological Power & Environmental Issues, Allahabad.

## 【現代インド地方言語の習得】について

習得することを目標として挙げたインド諸言語のうち、半マガダ語と現代グジャラート語の習得が成果として挙げられる。先述のように、インド古典言語の一つである半マガダ語で記されたジャイナ教聖典文献の解読研究は本研究の大きな位置を占めていた。滞在中は Saloni Joshi 教授(グジャラート大学プラークリット語学科教授)のもとで、基礎的な学習と実践的なテキストの解読までを行うことができたのは大きな成果である。また、現代グジャラート語に関しても、Nilotpala Gandhi 教授(同大学グジャラート語学科教授)のもとで習得し、グジャラート語で書かれたジャイナ教に関する資料の参照が可能になった。これによって、今まで日本国内にはさほど知られることのなかった先行研究にまでアクセスすることが可能となったのは、本研究にとって大きな成果であった。また、グジャラート語の習得は、ジャイナ教の僧侶たちとのコミュニケーションを円滑にすすめる上で非常に有益であった。

## 留学中の生活・研究でのトピックス

### 【留学中の生活について】

留学期間中は、所属の研究所に付属しているスタッフ用の住居スペースを提供していただき、そこに滞在していた。1年目の雨期の期間中、激しい雨によって、元より老朽化が進んでいたその建物が水漏れしてしまい、電気系統が完全に機能しなくなったため、建物全体が修復作業されることとなった。修復作業はおよそ半年に及んだが、その間は、同じ構内に点在している出家僧侶のためのスペースに滞在することとなった。報告者が滞在中は出家僧侶たちが訪れることはなかったが、普段は彼らが当研究所に立ち寄り、滞在する折にはその施設が彼らのために提供されることになっている。凶らずもジャイナ教の僧侶たちが普段使用している設備を使用することができたことは、とても貴重な体験であった。

研究所内には食堂がなかったため、通常は研究所外で食事をとることが多かった。そのため、現地の食べ物や街の人たちと多くふれ合う機会があり、街の雰囲気いち早くなじむことができたように思われる。乾期には最高気温が45℃以上になる日があった。それだけが唯一難点であった。

### 【研究でのトピックス】

当初の研究計画にあったように、ジャイナ教白衣派教団のうちでも正統派と言われるムールティプージャカ派のジャイナ学僧(Muni Pundarikaratnavijayaji 師)の遊行に随行し、文献収集の協力と指導を仰ぐことを目的としていたが、幸いなことに、計画通りジャイナ教の僧侶たちの遊行に随行する機会を得、彼らの日常的な修業の生活を間近に体験することができたことが、何よりも話題である。滞在していたアーメダバードからサンケーシュワルという町までの、およそ120kmほどの道のりを1週間かけて徒歩で彼らと共に移動した。

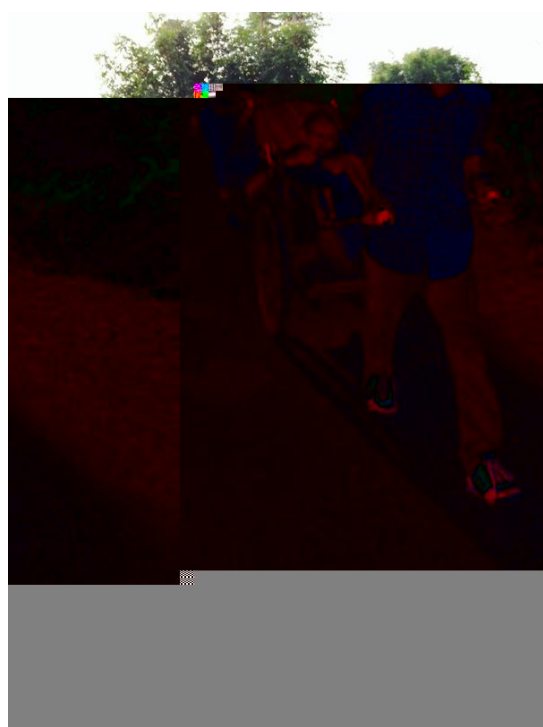
## 今後の社会貢献

先述のように、今回の留学期間中には、現代のジャイナ教の在家信者や出家者たちに触れることができ、ジャイナ教という宗教は、「自然の中にあって他の生き物たちと一定の距離を保ちながら、どこまでも『正気』を追求し続ける宗教」であるという印象を受けるに至り、またさらに、「宗教とは何か」ということについても改めて考察を深める機会を得た。彼らにとって宗教、すなわちジャイナ教という「教え」は、信仰であるばかりではなく、生活様式・倫理・文化といったものも包摂しているものである。

昨今頻発する暴力的な事件のなかで、「宗教」を争いごとの原因のひとつと考えてしまいがちな我々にとって、こういった、ガンディーの非暴力主義にも多大な影響を与えたとされる「不殺生」の教義を第一とし、平和を愛する彼らの姿勢から学ぶことは非常に多いと思われる。彼らの生き方を広く紹介することで、我々の宗教観、さらには倫理観や生き方までもを見直す機会を提供できるのではないかと考えている。



住居。2階部分に滞在していた。



ジャイナ教の僧侶の遊行に同行。



International Seminar on Sacred Places に参加。